

わが国周辺の国際情勢について

西 正典

一、日米関係の推移

(一九七〇年代まで)

お手元に、「日米防衛協力の経緯」と題する資料をお配りしました。この資料は、一九七〇年頃からの日米関係の推移を大まかに整理したものです。

左端に一九七六年の「防衛計画の大綱」の策定を掲げています。私が防衛庁に入る二年前ですが、ある意味で、これを以て戦後の防衛政策がよ

うやく神代を脱したと言えるように思います。

その背景ですが、一九七〇年代に入り、戦後のアメリカの力に陰りが出始めました。戦後のアメリカの世界覇権は、一方で軍事力に、他方で経済力、工業力に裏付けられていました。しかし、ソ連が、原水爆の開発に成功し、宇宙に衛星を打ち上げ、新しい戦略爆撃機を作るなど、急速にアメリカにキャッチアップしてきました。このため、アメリカの世界覇権は意外に早く揺らぎ始めます。さらに、一九五九年には、最初のドル危機が起りました。

一九六〇年代になって、傾き始めているアメリカをどうするか議論をしなければならぬ時に、アメリカはベトナム戦争にのめり込んでいきました。結果的に、これが傷口を広げ、アメリカの体力を大きく損なうことになったわけです。

(ニクソンショック)

一九六九年にニクソン政権が誕生しました。その後、ニクソンは、矢継ぎ早に幾つも驚異的なことをやりました。

経済面では、一オンス三五ドルの固定レートでの金とドルの交換を停止しました。

軍事面では、それまでアメリカは、ソ連、中国と戦争をし、同時に、中東で小規模紛争をこなせる戦力を持つことを目標にしていました。しかし、ニクソン政権の時代のアメリカの経済力では、それだけの戦力を持つことが不可能になりま

した。そこで、それまでの「二と二分の一」の戦力を「一と二分の一」の戦力に切り下げました。

こうした防衛力の概念の切り下げは、アメリカと中国の国交回復につながっていきました。

さらに、ヨーロッパと日本に対して、戦後の復興が進んだのだから、いつまでもアメリカに頼っていないで、少しはカネを出すようにという要求が始まりました。この帰結として、日本では、一九七八年度からアメリカ軍駐留経費の一部を負担するようになりました。当時の金丸防衛庁長官の命名で「思いやり予算」と呼ばれています。

最後の決定的なでき事は、ベトナム戦争の終結です。この時のアメリカの考え方は、あくまでもベトナム半島を南北に分けて勢力圏を確定するところにあります。しかし、その後、アメリカは、南ベトナムを失ってしまうことになりました。

私は、今もってニクソンが戦後アメリカ史上屈

指の名大統領であったと考えています。これほどの戦略の大転換を図った大統領は他におらず、あと強いて挙げるとすれば、冷戦を終わりに導いたレーガン大統領ではないかと思えます。

(日中国交回復)

この時期、石油ショックが日本を襲いました。これが、当時、防衛庁が取り組んでおりました、「第四次防衛力整備計画」をズタズタにしてみました。この計画で、自衛隊ではヘリコプター搭載護衛艦を四隻建造しました。同型艦である「はるな」「ひえい」「しらね」「くらま」です。これらの内、最初に建造した「はるま」「ひえい」の二隻は、建造開始後、石油ショックが起こり、予算が足りなくなったため、途中で設計を変更せざるをえなくなりました。このため、これらの二隻は、その後に建造した二隻と比べ、同型艦であ

りながら、規模が三〇〇トンほど小さくなっています。

この事実が提起したことは、それまでのような形で、このまま防衛力の整備を続けていけるのかということでした。議論の結果、中曽根防衛庁長官が「平和時の防衛力構想」を提起し、現に日本が持っている財政力と兵力量を前提に、防衛力を整備するという考え方が打ち出されました。

そこに起こったのが、アメリカの中国へのアプローチです。誕生したばかりの田中内閣にとっては、まさに絶好のタイミングでこのような動きが起きたわけです。田中内閣は、間髪を入れずに日中国交回復を成し遂げました。田中内閣がアメリカより早く日中国交回復を実現したため、後で、ニクソン政権に恨まれることになりました。

(防衛力の整備)

日本に次いで、アメリカも中国との関係改善に踏み切りました。中国というカードをソ連に対して使うことができるのではないかというキッシンジャーの考え方が背景にあります。

このことが、日本の防衛力整備にとつて非常に大きな意味を持ちました。それまでは「ソ連・ス中国」を仮想敵としていましたが、ここから、「ソ連・ス中国」を対象として日本の防衛力整備の議論ができるようになりました。言い方を変えれば、防衛力整備が具体的に実現可能な世界の話に変わってきたということです。それを文字に落としたのが、一九七六年の「防衛計画の大綱」です。ちょうどその頃、デタントと言われる、米ソ間の平和共存の動きが進んでいました。この時、「防衛計画の大綱」を取りまとめることができた背景には、このような事情もあったわけですから。

しかし、三年後の一九七九年の大みそかに、突然、ソ連がアフガニスタンに侵攻を始めました。

この結果、デタントは崩壊しました。後で申し上げますように、この時のソ連のアフガニスタン侵攻が、今日のIS（イスラム国）に至るまでの長いイスラム問題を生むきっかけになりました。

「防衛計画の大綱」策定の二年後の一九七八年に、「日米防衛協力のための指針」、いわゆる「ガイドライン」を策定しました。資料にもありますように、「防衛計画の大綱」はしばしば変わっておりますが、「ガイドライン」は、一九九〇年代に北朝鮮の問題が表に出た時と、二〇一五年の二回しか改定していません。このことは、我が国の防衛政策が日米関係と一体となって考えられていることを如実に示すものであると思います。

それでは、「ガイドライン」とは何でしょうか。一九七八年の「ガイドライン」策定までは、

日米の共同作戦計画はありませんでした。日米安全保障条約があり、これに基づいてアメリカが日本の防衛にコミットしているだけででした。「ガイドライン」が策定され、ここで初めて日米が共同で作戦を実施する際の考え方が整理されました。

その後、一九九〇年代に入り、北朝鮮が核やミサイルを持つとするとする動きを見せたところで、一気に新たな動きが起きました。北朝鮮危機が起きた時、当時の石原官房副長官が、「何かしなければならぬのはわかっているが、現行の法律や規則の下では、何もできないことがよくわかった」とおっしゃいました。この後、防衛庁に、大至急、有事法制を作れという指示が降ってきました。何しろ後から後から法律をくつつけていくものですから、口の悪い人からは、できの悪い温泉旅館のようだ、どこがどうなっているのかわからないと言われるのですが、ともかくそうして有事

法制を整備しました。

二、冷戦後の時代

(何が起きるか分からない時代)

このように、有事法制等の整備を進めつつ、同時に、周りで起きるさまざまな事態に対応してきました。いろいろな苦労がありますが、最も本質的な点は、これから先何が起きるのか、それが全くわからない時代に入ったということです。

私にとりまして、防衛問題に関する師匠と言えるのは、西廣整輝元防衛事務次官です。昭和二九年に東大文学部国史学科を卒業して、防衛庁に入りました。卒業論文のテーマが大阪の米相場で、そこでは、デリバティブも取り上げています。その頃にそのような研究していた人が他にいたのかと思うくらい、とんでもない発想を持った天才的

な方です。西廣元次官は一九九〇年に退官されました。その時、「自分が防衛庁で過ごしたのは全て冷戦の時代だった。冷戦の時代はわかりやすい。アメリカか、そうでなければソ連で、どちらが仕掛けたのかよくわかる。しかし、ソ連が崩壊し、冷戦が終わった。これからは何が起きるかわからない。君らは大変だが頑張れよ」とおっしゃいました。現実はまだにそのとおりなのです。今やアクターが多過ぎて、一体誰が何を仕掛けているのかよくわからないところまで来てしまっています。

(アフガニスタン)

その一つがアフガニスタン紛争です。私がオックスフォード大学に留学した時の指導教官はマイケル・ハワード先生でした。軍事史の大家ですが、その方が、ある時突然、「共産主義革命は口

シア人をばかにしてしまった」と言われました。

何の話かと伺いましたら、「ソ連のアフガニスタン侵攻だ。一九世紀の末に英口両帝国はアフガニスタンを舞台に三度の戦争をした。その結果、両国は、アフガニスタンには、ヤギとヒツジとアフガン人しか住むことができない、他の者は住めない場所だという教訓を得た。これが両国のコンセンサスになった。それ以来、英口両国は、アフガニスタンをバッファゾーンにして今日まで来た。ロシア人は、共産主義革命によってこのことを忘れてしまった。ソ連は、愚かにもアフガニスタンに侵攻したが、昔と同じようにひどい目に遭って追い出されるだろう」という答えが返ってきました。

これが一九八三年のことですが、結果として、その数年後、ソ連はアフガニスタンを出ていかにざるをえなくなりました。

ソ連がアフガニスタンに侵攻したことに対し、アメリカは、このままでは、ソ連がアフガニスタンを突破して、インド洋まで出てきかねないという恐怖感を持ちました。映画にもなっていないが、ある議員が一所懸命カネを集めて、武器を買いアフガンゲリラに送り込むといふとんでもないことをやり出しました。最後は、アメリカ政府もこれを支援するようになり、アフガニスタンにいろいろな武器が流れ込みました。

その時、アフガニスタンにゲリラとして入り込んだのがウサマ・ビン・ラディンです。その後、彼がアフガニスタンからサウジアラビアに戻って、直面したのが湾岸戦争でした。そこで、彼は、巨大なアメリカ軍、聖地メッカをないがしろにする異邦人、戒律を無視して素っぴんで歩き回る女の兵隊など、耐えがたいものを目にしました。ここから彼の精神遍歴が始まり、二〇〇一年

のワールドトレードセンターへのテロ攻撃まで突っ走ることになります。

その後、ウサマ・ビン・ラディンに対するアンチテーゼとして、ISが出てきました。冷戦が終わった後、このような長い歴史で見ないとわからないファクターが続々と生まれてきています。

(北朝鮮)

もう一つ、身近にある問題が北朝鮮です。しばしば誤解があるのですが、北朝鮮が中国と仲がよかったことは一度も無かったと言ってもよいかと思えます。昨年、中国の学者が書いた『最後の『天朝』』という本が出版されました。これによりまずと、毛沢東にとって朝鮮戦争は、金日成にそのかされたスターリンのために、やむをえずやらざるを得なくなった戦争でした。戦争の結果、中国義勇軍の兵士に多くの戦死者が出ました。ま

た、中国軍の中から、ばかにならない数の兵士が逃亡し、台湾に逃げ込んでしまいました。

その結果、中国に残ったのは負い目だけでした。戦前の日本地図には、吉林省の東部に間島という地名が出てきます。当時、金日成グループは間島バルチザンと呼ばれていました。中朝間では、この間島地区に対して北朝鮮の特別な地位を認めるといふ覚書が交わされています。

金正日が訪中した時、そこを訪問するに当たり、「間島地区視察」という旅程を示しました。

中国外交部が、中国の土地を訪問するのに視察といふ言葉を使うのは不適當だと言ったところ、北朝鮮外交部から、毛沢東が北朝鮮の特別な地位を保証している、だから視察と言えるのだと言われて、びっくり仰天したようです。先ほど申し上げた『最後の「天朝」』に出てくる話です。

それくらい面倒な中朝関係を作ったのが金日成

で、それを受け入れざるを得なかったのが毛沢東です。そのしこりはまだ残っています。

私が身近にそれを経験したのは、一〇年余り前に、中国各地に残っている旧日本軍の毒ガス兵器の処理に関わった時です。毒ガス兵器を見つけますと、それを掘り出し、旧日本軍の物であることを確認して、倉庫に入れます。ある程度の数量がたまつたところで処理施設を作り、片端から爆破していきます。今、このような作業が進められています。

中朝国境から非常に近いところに、琿春という町があります。その町で毒ガス兵器が見つかった時、中国側は従来とは全く違ったことを言い出しました。それまでは、毒ガス兵器を見つけますと、赤い旗を立て、周りを黄色と黒のテープで囲って、危険物があるという表示を行っていました。しかし、琿春では、中国側は、「埋め戻した

後、落ち葉でカムフラージュして絶対にばれないようにしてほしい」と言いました。なぜそのようなことをするのかと聞きますと、中国側は、「ここには、夜間、北朝鮮の特殊部隊が入ってくる。日中合作で進めている事業を、北朝鮮の連中に邪魔されたくない。後で中国側が掘り出して処理するから、日本側は忘れてくれ」と言いました。

当時、中国の三菱重工におもしろい日本人がいました。文革直前まで父親が天津市長をしており、母親が日本人という人物です。御他聞に漏れず、文革でひどい目に遭ったものですから、中国人ではあるが、共産党は大嫌いという、日本側にとっては格好の相談相手になる人物でした。

彼にこの話をしたところ、「それはそうだ。北朝鮮の連中がどういう態度で中国にやって来るか知っているか。彼らは中国に来て物乞いをするわけではない。彼らの言い方は『共産主義に忠実で

貧乏をしている北朝鮮に対し、共産主義を裏切つて金持ちになった中国がカネを出すのは当たり前だ』というものだ。とんでもないロジックだと思うかもしれないが、放っておくと何をされるかわからない。だから、中国としては、全部を御用立てすることは無理だと言いながらも、出せるものは一所懸命出さざるをえない」という返事が返ってきました。

最近も、北朝鮮は、ミサイルを発射する時に、北京の方向に向けたカメラで映像を撮って、それをテレビで流すような嫌がらせをしていました。加えて、北朝鮮は、核実験を広州で行われたB R I C Sの会合の初日に行いました。習近平が本気で怒り出しており、それが今の中朝関係の新しい火種になりつつあります。

(ロシア)

もう一つ面倒な課題として出てきたのは、ソ連邦の崩壊とその後の処理です。

ご存知のとおり、まだウクライナの問題が続いています。クリミア半島は、ロシア人にとっては心のふるさとのような場所です。例えば、トルストイのデビュー作は『セバストーポリ物語』です。クリミア半島で英仏軍とロシア軍が大変な戦争をしました。このクリミア戦争の内容を、三人の主人公の視点から、違う文体、違う調子で書いたもので、ロシア人が小さい時から読んで、魂を揺さぶられる一冊が上がってくる本です。

本来であれば、クリミア半島はロシア領にしておいてもよかったです。フルシチョフ時代に、行政整理のためにロシアからウクライナに移しました。このような間違った行政整理の結果を正しているだけだというのが、おそらくロシア側

の言い分だろうと思います。

その他にも、リトアニア、ラトビア、エストニアのバルト三国との関係、バルト三国とポーランドの間のカリーニングラードというロシアの飛び地など、幾つも難しい問題が残っています。本来、カリーニングランドの辺りは、ドイツ騎士団領で、この町で暮らした最も有名な人物がカントです。バルト三国とポーランドは、カリーニングラードへの回廊のないロシアが、いつ何時、回廊を作るために動くかわからないという恐怖感を抱いています。

そのような恐怖感、不安感が世界各地に残っています。歴史的に見ますと、中口の国境線についても非常に単純なことが見えてきます。つまり、一七世紀から一九世紀までの間、ロシアが東に勢力を伸ばす過程で、衰退期に入りつつあった中国からかすめ取った領土の線であるということ

す。言い換えれば、中口の不平等条約の結果として出てきたものです。それ以前は、沿海州までの全ての土地が中国の領土に入っていました。それをロシアが片端から奪っていった結果が、今の中口の国境線なのです。

今の中口の国境線は江沢民が承認しました。現在の指導者の習近平は中国の栄光の復活を口しています。彼は江沢民に引き立てられて出てきましたが、真つ先に恩人である江沢民を排除しようとした。プーチンは、そのような人間が今の国境線を末永く認めたままにいるわけがないと考えていることでしょう。プーチンと習近平がニコニコしながら握手をしているのを見ますと、キツネとタヌキの化かし合いも芸術の域に達しているように思われます。

しかし、ロシアがシベリア鉄道を北朝鮮に伸ばして、北朝鮮に対する援助を始めているのを見ま

すと、このような芸術を最後まで続けることは難しいように思われます。以前、新潟に入港していた、日本の対北朝鮮政策で来港が禁止された万景峰号がウラジオストクに入るようになりました。一時期、入港料、港湾使用料が未払いのため、入港が休止されていましたが、理由もなく一〇月三日から再開されました。おそらくカネを払ったわけではなく、何らかの理由でロシアが再開したのだと思います。

このように、今、私どもが目の前に行っている面倒な課題は、大体冷戦時代に種がまかれて、育っていたものであることがわかります。冷戦時代は、恐怖感のために表に出てこなかったものが、冷戦の終結を機に芽を出してきた結果と言っても差し支えないように思います。

三、アメリカの戦略観

(東アジア通貨危機)

以上で申し上げてきた政治現象より、もっと面倒なのが経済現象です。防衛省においても、一九九七年の東アジア通貨危機を契機に、経済と安全保障の関係を深刻に考える者が増えてきました。

その時、世銀・IMFが大慌てで飛び込んでいった先は、韓国とインドネシアでした。他方、タイに対しては非常にゆっくりと動きました。事情は簡単で、北朝鮮を抱えている韓国と、石油の輸送ルートであるマラッカ、ロンボクを抱え、地域の大国であるインドネシアの二つが安定していないと、東アジアは大変だというのがアメリカの戦略観なのです。世銀・IMFの動きは、裏を返しますと、アメリカの世界戦略上の判断を経済の

世界で具現化したものということができます。

アメリカの政府機関が何をやっているのか、外から見てもよくわかりませんし、優秀な官僚制度だと言われることもありませんが、それらの機関の視野には非常に多くのものが入ってきています。

(LIBORスキャンダル)

数年前、LIBORのスキャンダルがあり、大騒ぎになりました。日米間の国防担当者が対話する場で、アメリカ側にこの問題について勉強しているのかと聞きますと、「国務省、国防省、財務省、USTRでやっている」という答えがすぐに返ってきました。

彼らにとって、LIBORのスキャンダルは、世界の価値基準がずれるかもしれない問題であると受け止められたようです。当時、イギリスで

は、グリニッジがなくなるようなものだと言われている。国防省の人間ですら、そのような感覚を持ち得るといのが、アメリカの世界戦略のすごさ、幅の広さだと思います。

なお、アメリカも、徐々にこのような知恵をなくしつつあります。いつからかと聞かれますと、答えづらいのですが、少なくとも二一世紀に入ってから衰えが目立つように感じることはありません。

(ソ連におけるクーデター騒動)

ソ連共産党が崩壊する過程で、モスクワでゴルバチョフに対するクーデターが起こりました。エリツィンが一気に表舞台に登場するあの瞬間です。

その時も、アメリカは、クーデターの見通しに関する調査を一気に始めました。調査に携わった

中国問題専門家は、間髪を入れず「ジェルジンスキー師団は動いているのか」と聞きました。ジェルジンスキーはKGBの生みの親で、その名前を冠した師団は、モスクワに駐留し首都の警備に従事しています。彼が聞いたのは、首都の警備を担うジェルジンスキー師団は、クーデター部隊と一緒に動いているのか、それとも何も知らずに兵営の中にいるのかということでした。

後で彼が教えてくれたのは、「中国の唐、宋の時代を見ればわかるとおり、首都の反乱は必ずクーデターになる。その時の最大のポイントは、首都警備の部隊が動いているかどうかだ。その動静によってクーデターの成否が決まる。これは中国の古典的な知恵だ」ということでした。さらに、彼は、「すぐに質問に対する答えが返ってきて、首都警備部隊は動いていないということだった。そこで、直ちにこのクーデターは失敗すると

いう報告をホワイトハウスに送った。今でもあの結果には満足している」と言っていました。

実際に、このクーデターはすぐに失敗に終わりました。このように、現実を見る中で歴史の知恵を生かすという発想は、まだアメリカの中に残っているように思います。

四、北朝鮮とアメリカ

(長く平常化した危機)

次に、北朝鮮を巡って、今何が起きているのかを見ていきたいと思えます。

まず指摘できるのは、北朝鮮の関係で世界中のマスコミが騒ぎ過ぎだということです。火事場のやじ馬のように、戦争が起きるとおもしろい、書くネタがたくさん出てくるという感覚で、戦争がいつ起きるかということばかり報道しています。

しかし、基本的には戦争は起こりません。私は、どうしようもないならみ合いが、このままだったらと続いていくと見ています。天気予報と同様に、今日のミサイル予想などというコラムが出てくるかもしれません。それほど長く平常化した危機になるリスクがあります。金正恩には、トランプが何をやるか読めず、我々には、金正恩が何をやるか読めないという事情が背景にあります。

(読めない金正恩の動き)

金日成、金正日の時代は、まだ彼らの動きが読めました。毎年四月に米韓が合同軍事演習をやります。それに対して、北朝鮮も動員をかけて部隊を動かししました。米韓が作るテンションに反応して、北朝鮮も動くわけです。米韓の演習が終わりますと、それに合わせて、彼らもテンションを下げて動員を解除しました。毎年同じことを繰り返

していました。

ところが、金正恩がトップになった二〇一二年に、彼が何をやったかと言いますと、米韓軍が動き出した途端、いきなりトップギアに入れてしまったのです。この後、どのようにして下りてくるつもりかと思いましたが、五月に入って、これから我が軍は援農作業に入ると言って、いきなり動員を解除しました。その瞬間から、軍事関係者は、金正恩は自分たちとは全く別のロジックで生きていると受け止め、恐怖感を持ち始めたのです。

(読めないトランプの動き)

我々が金正恩を読めないのと同様に、彼もまた、トランプが何をしようとしているのかよく読めていません。したがって、金正恩は、二〇一〇年に「天安」という韓国のフリゲート艦を魚

雷攻撃して沈めたり、西海岸の延坪島に対していきなり砲撃を行ったりするような、軍事的な冒険主義は今はやりたくてもできません。そのような冒険主義に走った瞬間に、トランプが何をするかわからないという恐怖感を持っているからです。その点で、今は、互いに心理的な抑止が効いている状態になっています。互いに動けないと言った方がよいかもしれません。

(北朝鮮に対する制裁の効果)

互いに動けない状態で時間が経過すると、どちらのメリットになるのか、これがおもしろい点です。今まで、核弾頭やICBMの開発を進める上で、時間は北朝鮮にとって有利に働きました。ところが、これらが完成の域に近づいてきたために、時間のメリットは北朝鮮の手に残らなくなってきました。壇ノ浦における源平の戦いと同様

に、今や潮の流れが変わりつつあるのかもしれない。確定的なことを申し上げることはできませんが、これから先、北朝鮮に対する制裁の効果が表われてきますと、北朝鮮内の窮迫が進んでいきます。

北朝鮮に対する制裁の実効性を担保しているのが、トランプです。彼は、毎週のように中国の習近平に電話して、「中国の何とかという会社が制裁違反をしているようだが、ちゃんと取り締まっているのか」といった、おそろしく細かい話をしているようです。習近平の手元には、そうした細かい話は上がってきません。このため、習近平は、自分が知らない話を持ち出され、メンツを失ってしまうことになりま。メンツを失うことほど、中国人にとって腹の立つことはありません。習近平が怒り、それが部下に降ってくるため、部下は必死になって制裁を実効あらしめよう

とします。結果として、思ったより真面目に中国が制裁に向かって動いているように見えます。皮肉としか言いようがありません。

五、日本の安全保障に影響を及ぼすファクター

(ロシア)

我が国の安全保障にとって重大なものは昔と変わらず、ロシア、中国、北朝鮮です。

まず、ロシアから取り上げます。ロシアの正面は、あくまでも西側、つまりヨーロッパです。ロシアに関しては、フランスに、九〇歳を超える高齢の女性で、エレヌ・カレルダンコースという方がいます。彼女の父親は共産主義革命から逃げてきた人物で、彼女自身は長くロシアの分析に従事しています。彼女がいる限り、ロシアが何

をやっているのかわかると言われるほど、彼女のロシア分析には定評があります。天才と言うより、努力の人と言った方がよいと思います。プーチンも、彼女をロシアの第二大使と言って敬意を払っています。

彼女は、『未完のロシア』という薄いロシア通史の本を出しています。これは日本語にも翻訳されています。この本の最後の結論部分で、彼女は、ロシアについて、西側に追いつこうとして、もう少しで追いつけそうになった瞬間に、何かが起きて後退を強いられ、追いつけずじまいで終わる国だと言っています。これが彼女のロシア評です。

彼女は、共産主義革命について、「イヴァン雷帝の農奴制の復活だ」と看破します。ロシアは、国土が広い一方で人口が少なく、しかも土地が豊かですから、ロシアの農民は、耕して農地が痩せ

ると、別の場所に移動しそこを耕して暮らしていました。自分たちが食べるだけであればそれでよかったわけですが、封建領主にとっては、自分の経済基盤が日々動いていくような恐怖感を持たざるをえません。自分の富を確保するためには、農民を土地に縛りつけておく必要があります、これが農奴制の発端だったのです。

その後、市民社会になって、移動は徐々に自由になってくるのですが、ソ連共産党の時代になって、国内移動のためのパスポートの制度が生まれました。つまり、再び国内で国民の管理が始まりました。そのことを指して、彼女は農奴制の復活と言いました。半ば皮肉ではありますが、彼女の分析は的を射たものであると思います。

プーチンは、長くKGBでアクシオンオフィサーとして働いていましたので、相当怖いことをやっているはず。彼は、性格上、絶対的な忠

誠心を要求します。最もそれが如実に表われたのは、スノーデンがロシアに亡命した際、そのことについて記者会見をした時のプーチンです。彼は、スノーデンの亡命が正当なものである旨の発言をしましたが、その間、目は泳ぐわ、手は握るわ、足はイライラ動かすわという状態でした。つまり、彼にとつては、裏切り者を引き受け、弁護せざるをえないことが本当に不愉快で、そのような気持ちが表示や態度に表われたというわけです。それがプーチンの物の考え方です。

ロシアの統治機構においては、すべての情報が彼に集中します。ただし、情報ソースが全てはばらに管理されているため、それらを横断的に管理できる中間層というものがありません。彼に全てがつながるような煙突型の情報の上げ方、政策の作り方ですから、全体像を知っている人間はプーチンただ一人です。

そのようなプーチンがいなくなったらどうなるかということが、既にアメリカのマスメディアで取り上げられ始めています。繰り返しになります。ロシアではプーチンという存在が全てです。そして、その人間は西側を向いています。その人間の分析に関しては、間違いなく、信頼に足るニュースソースが西側にはあります。ですから、我々にとって、ロシアとのデールは、面倒ではあっても、突発的な事態に直面するようなことはないだろうと考えてよいと思います。

(中国)

中国では、来週、共産党大会があります。最近ようやく論調の整理が進んできましたが、今のところ、習近平の方が党内で劣勢です。彼は、非常に多くの腐敗、墮落した高官を追放し、その後に自分の陣営の人間を据えています。このことは、

要は陣取り合戦をしているだけだと考えればよいと思います。日中戦争で、日本は点と線は確保したが、面は取れなかったと言われました。それと似ています。彼は、個々のポストは押さえていますが、広がりを持って党を掌握するところまでは到底行っていません。中国共産党には八〇〇〇万人から九〇〇〇万人の党員がいます。それを全てコントロールするだけの力は、今の習近平にはありません。

重要なのは人事です。習近平は、これまで汚職追放のために旗を振ってきた王岐山の定年延長を図ろうとしました。しかし、長老からノーを食らったため、王岐山は消えざるを得ません。今回、新しく腐敗追及を専門とする監察院のような部署を作りますので、そちらに回すようなことはあるかもしれませんが、いずれにせよトップレベルからは外れます。

もう一つ、習近平の後継指名はまだできないと思います。習近平は、最近、重慶の党委員会書記に据えた陳敏爾を推したのですが、長老がそろって反対しました。長老は、胡春華という共青团系の人物を推しました。元来、共青团系統と江沢民系統が二つに分かれており、江沢民系統は、孫政才という人物を推していました。彼が習近平に潰されてしまいましたので、江沢民系統も共青团の方になだれ込んできて、胡春華を推し始めました。このようなことも踏まえて、党内のパワーバランスを見ますと、おそらく習近平の方が優勢です。そのような劣勢の習近平が、次の五年間で何をやるのか、その点が最も難しいところではないかと思えます。

長い間、中国史を勉強した人間として、私は、もう共産王朝は滅びる直前なのだろうと思っ
て見ます。しかし、どのような滅び方をして、そ

の時に何が起きるのか、全く想像がつきません。

ソ連が崩壊してロシアになった時、ロシア社会を安定的に推移させたのはモスクワ正教です。ギリシャ正教の系譜を引く、独自のキリスト教です。これが今、全面的に復活してきています。当然のことながら、モスクワ正教会の大司教は、プーチンとべったりくっついて活動しています。国民の九割以上がモスクワ正教の信者ですから、世の中に安定感をもたらし、価値観の基準を作っています。

他方、中国の場合、文化大革命の時にそのようなものを全て壊しました。何も残っていないわけです。元来、中国の基本には、天を祭るといことがありました。天があり、その天が命を下すことによって、世の中の原理原則が順調に動くという秩序観です。重大なことは、皇帝が天を祭り、天の意を忖度するということです。

「祭る」という行為の最小単位は家族です。ここで、祭るのはあくまでも男子に限られます。古い中国で「子供は何人いるか」と聞かれて、答えるのは男子の数だけで、女子は数に入れません。男子の系譜が残っている限り、祖先を祭ることができます。祭られた祖先は安らかで物事が治まります。他方、祭られない祖先がどうなるかと申しますと、鬼、つまり、怨霊になります。

中国では、共産党政権ができるまでは、祖霊崇拜が価値観の基準になっていました。しかし、共産主義革命が起こった後、ひとりっ子政策を推進したことなどもあって、祭られない祖霊が蟠踞するようになりました。

これに関していろいろな中国人に聞きましたが、皆が違うことを言います。一方には、「あんなものは古い時代の迷信だから一切関係ない」と言う合理主義者がおり、他方には、「今や中国に

は怨靈があふれ返っており、じきにこの国は滅びるであろう」と言う人がいます。それくらい、中国では共通の価値観がなくなったわけです。このように、共通の価値観がなくなった社会で、力による支配が通用しなくなった時に何が起きるのか、私はこの点を非常に心配しています。習近平が今回の共産党大会を無事に乗り切れるか、乗り切った後、次の五年間を無事に過ごすことができるか、この先三年前後の間に後継指名ができるか、この辺りがポイントになると思います。言い方を変えますと、習近平政権の余命は、よくてもあと三年くらいではないかという感じで見ています。

(朝鮮半島)

朝鮮半島に関しては、私は全くわかりません。それは、朝鮮には一貫した歴史がないためです。

常に周りから殴られてゆがんでしまうのです。最もひどいゆがみは、モンゴルに侵略されたときに生じました。

朝鮮は中国の勢力圏下で育ってきた国ですから、中華の信仰があり、これが文明の基本でした。それによれば、朝鮮は中華のすぐ脇に位置するため、中華そのものではないが、極めて貴い国であるという自己規定がなされます。モンゴルによって南宋の王朝が滅び、中華の正統が滅びた時、中華は朝鮮に移らざるを得ないと彼らは考えました。そう思つて胸を反らしたら、中華を滅びしたモンゴルが侵入し、朝鮮は酷い目にあいました。そして、自分たちが軽蔑してやまない蛮人の靴をなめさせられることになりました。モンゴル治下の朝鮮王朝は、このような屈辱を強いられ、社会現象としてのゆがみを持ち始めました。

他方、中国の場合は、本家本元ですので、モン

ゴルに対する精神的な合理化が可能で、モンゴルが消えれば、中華が復活すると考えることができず。中国からしますと、中華が減じたと思つたのは朝鮮の間違いで、中華は滅びないのだということになります。

しかも、朝鮮半島の中の勢力図も目まぐるしく動きます。北の方は満州からの遊牧民が入り込むケースが多く、南の方は農耕系です。もともと、具体的な構成がどうなっているのかはわかりません。歴史書は残っているのですが、その記述は基本的に中国の歴史観に基づいており、朝鮮民族に妥当する歴史観であるという保証がありません。このため、朝鮮の王朝史が、本音と建前がわかりやすく書かれた歴史書なのかどうかはどうしてもわからないのです。

他方、中国の場合、王朝の性格は非常にはつきりとわかります。徳のある者が天の命を受けて王

朝を建てる、これが中国の王朝の基本です。王朝の創始者は、天の徳を受けるに足る、豊かでふくよかな人物として描かれています。このようなうそ八百が最も極端に表われているのが、明の初代皇帝の朱元璋です。グーグルで「朱元璋 肖像画」を打ち込んで検索しますと、二つの肖像画が出てきます。一つは、福徳円満の塊のような人物の肖像画です。もう一つは、これでも人間かと思うような顔をした人物の肖像画です。そして、後の肖像画に「明太祖真像」（皇帝の本当の肖像）という説明が付されています。

つまり、中国では、このように建前と本音を使い分けています。現実に対して、あるべきフィクションはこれだというロジックを、自分で作って動かしている人間は強いと言えます。他方、そうしたロジックを外から借りたままにいる人間は、立ち直り力、あるいは修正力が非常に弱いように

思います。このことが、私にとつて朝鮮史がわからない最大の理由ではないかと思つています。

(日本)

以上で述べたことに関連して、日本についても触れておきたいと思つています。日本の場合、中国の王朝観あるいは天命説を借りているのですが、途中で独自のものに作りかえました。鎌倉時代に承久の乱と呼ばれる騒動が起りました。後鳥羽上皇が時の鎌倉將軍家に対して兵を挙げたものです。

しかし、將軍の任命権者は天皇で、それより偉いのが上皇です。將軍に対して不満があるのなら、辞めさせればよいのに、なぜ兵を挙げるのかというのが、当初の鎌倉の御家人の反応でした。その後、これはまずい、京都に行つて謝らなければならぬのではないかという議論が起きました。

た。論理的にはまさに正しい議論なのですが、その時、源頼朝の未亡人の北条政子が出てきました。

彼女は、「皆の所領は誰が保証していると思つているのか。鎌倉の將軍様がいなくなれば、所領が保証されなくなつて困つてしまうのではないか。そうならないようにするためには、將軍を廃止しようとする京都の朝廷を黙らせるしかないだろう」というわかりやすいロジックで、御家人に発破をかけました。これは、任命権の序列からしますと、とんでもない下剋上に他なりません。しかし、それで現実はどうなるのです。

その結果、大量の兵力を擁した幕府軍が上洛しました。政子は、自分の孫の北条泰時を総大将に据えました。彼女は、当時一〇歳の泰時に対し、「お前が総大将をやりなさい。恐れ多くも天朝様に立ち向かう以上、お前は死ななくてはなりません」

んよ」と言いました。このような振る舞いを見ますと、政子はまさに政治的な天才だと思えます。結果的に、京都の朝廷が自己崩壊を起こしてしまい、後鳥羽上皇は隠岐の島に流されました。政治の処理プロセスとして、ここまではうまく行きました。

最後に残った難題が、これをどのように歴史書に書くかということです。任命序列から言って、上が下に向かって兵を挙げるのは、論理的にも、倫理的にもあり得ないことです。しかし、現実には、兵を挙げて世の中を脅かすという現象が起こったのです。当時の言い方では謀反に当たります。しかし、本来、謀反というのは下が上に対して起こすものです。承久の乱は、上が下に対して起こしたものです。世の中を騒がせた罪の重さに照らせば、謀反に当たることになります。そうした堂々巡りの中で、ついに出てきた答えが、

「御」の一字を付けて、「天皇御謀反」と呼ぶというものです。これによって、歴史書の中で承久の乱の性格が全て集約されることになりました。この瞬間から、日本における秩序制度が日本独自のものに生まれ変わったのではないかと思えます。

私は、このことを歴史書で読んだ時、なるほど、天才的な発想だと思いました。しかし、「御」の字を冠した人が誰なのか、歴史書を調べてもどこにも出てきません。結局、日本人のトータル知恵なのだと思います。このようにして、日本は、自分たちの独自のロジックで動けるようになりました。このことが、日本において、中国と異なり、朝鮮とも異なる独自の政治力を生んだベースになったのだろうと考えています。

六、まとめ

これから先、世界がどのようになっていくのかを考える時、全くロジックが異なる者同士が相対していることに留意しなければなりません。

冷戦の時代がわかりやすかったのは、一つは、アクターが米ソの二人しかいなかったこと、もう一つは、アメリカもソ連もロジックの基本がキリスト教にあることです。軍事のコンセプト用語を見ますと、スコラ哲学に端を発する用語が多いことがわかります。冷戦の時代において、アメリカとソ連がやったことは、ほとんど鏡に映したように同じです。アメリカ軍が緻密な兵器体系を作りますと、ソ連軍も負けじと同じ兵器体系を作ります。米ソの場合、通常兵力から始まって、核兵器に至るまでの間、兵力を整備する上でのロジック

クが非常にはつきりしています。しかし、そのような感覚は中国人にはありません。中国の場合、通常兵器と核兵器の間はスカスカです。さらにひどいのが北朝鮮で、通常兵力はないに等しく、事實上、核兵器しか持っていません。

このように、ロジックが異なる者同士が向き合っている中で、これからのように収拾していけばよいのか、答えがない状況が続きます。この点について、双方の意図を解釈し、意思疎通を図る役割を果たしうるのは日本だろうと思います。現に、外務省や防衛省はそのような方向に向かって動いています。しかし、トランプの動きが読みづらいこともあって、今のよう難しい状況がもうしばらく続くことは避けられないのではないかと思います。

北朝鮮問題に関しては、中国や経済のファクターなどが、米朝の対決にどのようなインパクト

を与えるかによって、ゲームの動き方が変わって
いくように思います。決着までかなり長い期間を
要することになるのか、それとも、サイドストー
リーの一種がより早く劇的に動くことによって、
今の米朝の対決に影響を及ぼすことになるのか、
そこは、今の時点では何とも申し上げられませ
ん。ただ、あえて申し上げますと、決着まで時間
がかかるだろうという覚悟だけは持つておいた方
がよいと思います。

御清聴どうもありがとうございました。(拍手)

増井理事長 西元次官、どうもありがとうございます
ました。

各国の歴史やバックボーンを踏まえた、大変有
意義で興味深いお話を伺うことができました。

それでは、若干お時間が過ぎいますので、皆様
方の方から御質問はございませんでしょうか。

質問者A 今日、歴史をさかのぼりながら、大
変わかりやすいお話を聞かせていただきありがと
うございました。

今、北朝鮮問題が静かになっているのは、心理
的な抑止が働いているからというお話を伺い、こ
れはこれで納得できました。北朝鮮の核・ミサイ
ルの開発のスピードに対して、日米韓の防衛力の
整備が遅れをとっていると言われますが、仮にそ
うだとすれば、何をどうすれば、日米韓は北朝鮮
の開発スピードに並ぶことができるのでし
ょうか。

西 基本的にミサイル防衛には限界があります。

専門用語で飽和攻撃と言うのですが、ミサイルを
一〇〇発も二〇〇発も撃たれますと、間に合いま
せん。ミサイル防衛は、あくまでも相手が撃つて
くるミサイルの数が限られている時に、それを撃
ち落とそうとするものです。

それでは、相手が飽和攻撃をしてきた時にはどうするのでしょうか。この時は、相手が撃ち込んできたミサイルの一〇倍のミサイルを撃ち返すこととなります。それが、相互確証破壊（MAD (Mutual Assured Destruction)）と言われるものです。相手がペチャンコになるまで殴ってしまおうというもので、アメリカとソ連の間では、このようなロジックが機能しました。互いにペチャンコになってしまふのは嫌だから、ぎりぎりのところで踏みとどまって、より下の方で蹴り合いをするということができました。

しかし、現状では、北朝鮮がMADの議論を理解して動いているのかどうかはわかりません。アメリカにしてみますと、北朝鮮にミサイルを撃ち込むことはできません。しかし、それと引き換えに、北朝鮮は、通常兵力でソウルを火の海にすることが可能です。また、撃ち漏らしたミサイルを

使って、核弾頭を日本や韓国に撃ち込むことも可能です。したがって、軍事力で北朝鮮を完全に封じ込めることができるかと申しますと、それは無理です。

軍事力で封じ込め切れないから、城攻めと同様に、相手が白旗を掲げるまで制裁を行うことになりません。制裁の結果、相手が耐えきれなくなつて突撃してくるのか、あるいは、城を明け渡して落ち武者になるのか、それはわかりません。

最近、出された論文で中国の学者が、北朝鮮の核の制圧は米軍が行うか、中国軍が行うか、その時、地理に詳しい韓国軍には何をさせるのかといったことについて、米中でプランを作るべきではないかと言っています。この論文は英語でも出ておりますので、中国政府も了解した内容であると考えられます。また、難民の大量発生に備えてバッファゾーンを作るとしたら、国境の中国側

に作るのがよいか、あるいは、北朝鮮側に作るの
がよいか、といった議論もなされています。中国
側からアメリカに対して、そろそろこのような議
論を始めた方がよいのではないかというサインを
送り始めているのだと思います。

単に軍事的にこれを準備すればよい、あるいは
これさえ持っていれば守りは完璧である、といっ
たことはありません。完璧に守ろうとしますと、
どこまで相手を完膚なきまでにたたくことができ
るか、という話になってしまいます。したがいま
して、トランプが言っていることは正論のように
見えて、やや的外れと言わざるを得ません。時間
稼ぎという側面が強いのではないかと思います。
増井理事長 大変深刻なお話だと思えます。

その他に御質問はございますでしょうか。

質問者B 今日は大変貴重でわかりやすいお話を
聞かせていただき、どうも大変ありがとうございます

ました。

今、北朝鮮のミサイルが日本国民の関心事に
なっています。北朝鮮から見た時、日本やグアム
などにミサイルを撃ち込むことに、どのようなイ
ンセンティブがあるのでしょうか。本当にそのよ
うなことをするとしたら、北朝鮮の国内がどのよ
うな状態になっている時なのでしょうか。

西 単におどしです。ミサイルを撃ち込むぞと
言って、相手の譲歩を引き出そうとしているだけ
です。それに対して、トランプが「そのようなこ
とをしたら、どのような目に遭うかわかっている
のか」と言いますと、あいつだったら何やるかわ
からないぞというのが金正恩の胸の内だと思いま
す。

金正恩も手詰まりになっています。九月二一日
の声明で、彼は、アメリカに対する「史上最高の
超強硬措置の断行」に言及しつつ、それに続けて

「慎重に考慮するであろう」と言っています。つまり、何をやったらよいかわからないから、ちよつと待ってねと言っているわけです。

アメリカも北朝鮮も、互いに手詰まりな状態が続いています。時間がどちらの側に有利に働くのか、その時間をより有利に使うために何をしたらよいか、北朝鮮を思いきり締め上げるとしたら、何をすればよいか、さらに考えていかなければなりません。

例えば、日本国内からハンドキャリアでお金が北朝鮮に流れているリスクが残っています。しかし、それを本気で止めようとしますと、警察や公安機関が市民社会の中に手を突っ込んでいくことにもなりかねません。世の中がそれに耐えられるか、言い方を換えれば、手を汚してでも、やるべきことをやろうとする覚悟があるか、このようなことを本気で考えることが求められてくるのでは

ないかと思えます。

増井理事長 そろそろお時間でございます。今日は大変興味深いお話をお聞かせいただきました。最後に、お忙しいところをわざわざお越しいただきました西元次官に拍手を送りたいと思います。

(拍手) (了)

(にし) まさのり・元防衛事務次官

(本稿は、平成二九年一〇月一二日に開催した講演会での講演の要旨を整理したものであり、文責は当研究所にある。)

西 正 典 氏

略 歴

昭和53年	3月	東京大学法学部卒業
昭和53年	4月	経理局会計課
昭和54年	4月	防衛局防衛課
昭和55年	4月	長官官房総務課
昭和56年	4月	通商産業省基礎産業局総務課
	6月	同 同 製鉄課
昭和58年	4月	防衛庁部員長官官房総務課
昭和61年	6月	同 経理局会計課予算・決算班
昭和63年	6月	同 人事局人事第1課
平成1年	9月	同 防衛局防衛課総括班長
平成3年	5月	同 同 (兼)防衛局防衛課政策班長
	11月	同 長官官房総務課(秘書官事務取扱)
平成4年	12月	同 同 国際室長
平成5年	7月	同 長官官房企画官(兼)装備局管理課
平成7年	8月	同 長官官房秘書課
平成8年	7月	装備局武器需品課長
平成9年	7月	同 艦船武器課長
平成10年	6月	防衛施設庁施設部施設企画課長
平成12年	6月	長官官房広報課長
平成14年	8月	長官官房秘書課長
平成16年	7月	那覇防衛施設局長
平成18年	1月	技術研究本部副本部長
	8月	外務省大臣官房審議官
平成19年	2月	外務省大臣官房 (併)内閣府大臣官房審議官 大臣官房遺棄化学兵器処理担当室長 (併)内閣官房内閣審議官(内閣官房副長官補付) 内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長
平成21年	8月	経理装備局長
平成23年	8月	防衛政策局長
平成25年	4月	防衛事務次官
平成27年	10月	退官
	10月	防衛大臣政策参与
平成28年	12月	退官
平成29年	8月	防衛大臣政策参与